



明日のことまで思い悩むな!!

～オランダ・ベルギーの旅①～

妻は学生時代に山口教会で洗礼を受けた。当時はスペイン人のシスターが多く、料理やケーキづくりを習い、産まれた三人の子供のおやつは手づくり。そんな環境で育ったせいが長女は料理やケーキづくりが実にうまい。子供は親の背中を見て育つとはよく言ったものだ。三年前、病気で左半身が不自由になった妻から習い、今では私がケーキを焼く。先日、そのケー

キを持って山口市の高校時代の友人を訪ねた。彼から「山口高校同窓会誌・熱球に貴君の名前を拝借する」とのFAXが届いたからだ。彼はストレートで中央大学法科に入学、在学中に司法試験に合格した。順風満帆で悩んだことなどないと思っていたが、FAXには今まで知らなかったことが書かれていた。司法試験合格を目指し、一日十五、六時間法

律書と格闘するが、合格の自信はなく、将来を考えると、あと何年このような辛い思いをしなければならぬだろうかと不安と焦燥に駆られる。その不安を在京の数人の同級生に電話する。数日後、電話をした一人の女性から葉書が届く。そこには、こんな言葉があった。

「今日生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の花でさえ、神はこのように装ってくださる。だから明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労はその日だけで十分である（マタイによる福音書より）」

この聖書の一節は私の悩み苦しみを見事に断ち切ってくれたとある。二人ともクリスチャンではない。そして彼は一回で司法試験に合格、二年後の昭和三十九年に葉書の彼女と結婚した。FAXはさらに結婚披露宴の司会はKRYの花形アナウンサーであった山高同級生の藤屋侃士君が務めてくれたと私を持ち上げてくれる。実は彼だけでなく息子さんの結婚披露宴の司会までさせてもらった。

ケーキを届けると「かんちゃん、十一月に結婚五十年の祝いをするから出席してほしい」。結婚、改めてマタイ福音書六

章の最後「思い悩むな」を読む。次の章には「人を裁くな」「求めなさい。そうすれば与えられる」と続く。そうだ、明日のことまで思い悩むことなく、明日は神に委ね、気分一新、旅に出よう。人はなぜ巡礼の旅に出るのか。旅という非日常の体験の中から前向きな日常生活を目指すためではないだろうか。かなり衝動的決断だったが、体が不自由な妻と金婚前年祝い、来年の年賀状の写真を撮るためオランダ・ベルギーの旅に出た。



アムステルダム北15^号、

ザンセ・スカンスの風車